

劇音楽の教材研究について
—作品名と内容の關係に着目して—

小原 伸一

宇都宮大学教育学部研究紀要 第69号 別刷

2019年3月4日

劇音楽の教材研究について

—作品名と内容の関係に着目して—

On Teaching Material Research of the Dramatic Music
: Focusing on the Relationship between the Title and the Contents

小原 伸一[†]
KOHARA Shin-ichi

劇音楽の作品名は、その内容を集約し端的に表していると考えられる。鑑賞する場合、作品名は作品が描き出そうとしている最も重要な主題として認識される。また、作品名は作曲者自身によって命名されていることから、作品の意義や価値を明らかにする上でも、作品名をふまえて内容の検討を行うことが大切である。このように、作品名は描かれた内容全体を象徴するキーワードとして作品理解を助ける窓口となる。一方、作品名が作品の印象に与える影響も大きいことから解釈によっては作品の本質に深く迫ることなく、表記された語句から表層のみを捉えてしまうこともある。作品名が含む語句には直接表わされていない背景があることにも留意し、作品の内容について多面的で深い理解を得ることが重要である。

そこで、ヴェルディの歌劇《シチリアの晩鐘》を例に、教材研究について作品名と作品の内容との関連から考察した。

キーワード：劇音楽，歌劇，作品名

1. はじめに

まだ鑑賞したことのない歌劇の内容について知りたい時、作品に付けられた作品名はそこに何が描かれているのかを考える最初の糸口となる。例えば、モーツァルトの歌劇《フィガロの結婚》ならば、作品名から「フィガロ」という人物の「結婚」について書かれていると想像することが可能である。そして、この歌劇がオペラ・ブッファであるという情報が加わると、結婚までの面白いドタバタ音楽劇だという予想が成り立つ。しかし教材研究を進めると、この作品は単にフィガロがめでたくスザンナと結婚するまでの物語を喜劇として描いているだけでなく、そこに設定された様々な背景や人物関係を通して、人間の寛容さという極めて重要なテーマを扱っていることに気づく。このことは作品名の中に記されていない事柄である。このような内容は作品名に直接表されていないが、作品の本質的な意味を理解した時、この歌劇に作曲したモーツァルトの音楽を正しく理解し評価することが可能になってくる。作品名が作品の存在そのものを担う機能を持つことは確かであるが、同時に、作品名から受ける第一印象に内容の予測を限定してしまうと作品の本質を見失うことにもなる。タイトルとし

[†] 宇都宮大学 教育学部 (連絡先: koharas@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

ての作品名をふまえつつ、それを起点に作品全体の意味を理解することが重要である。

このように、作品名は教材研究で作品の内容を把握するための最初の手掛かりを提供する役割を持つものとして認識され、内容の理解が深まるとともに隠れていた意味が加えられる。その一方で、内容の研究が深まるにつれ次第にその存在が薄れてしまうこともある。作品全体を適切に捉えるためにも、作品名も作品の一面を語る大切な情報として取り扱い、内容との関わりから再認識することが求められる。

そこで本論では、ヴェルディの歌劇《シチリアの晩鐘》を例に、作品名について作品内容との関係に着目し考察した。

2. 歌劇《シチリアの晩鐘》作品名と作品の概要(1)

2-1. 作品名

本論では本作品の日本語作品名を《シチリアの晩鐘》とした。楽譜¹に記されている原語の作品名は“*I Vespri Siciliani*”²である。この歌劇は原語の題名から《シチリア島の夕べの祈り》と表記される場合がある³。

《シチリアの晩鐘》という作品名は、実際に起きた「シチリアの晩禱事件」が歌劇の中で主要な題材として扱われていることによるものである。この事件は、1282年3月29日の復活祭の日にシチリア島のパレルモで実際に起こったシチリア人によるフランス人虐殺事件である。

この事件は復活祭の夕方、パレルモにあるサント・スピリト教会から起こった。当時フランス軍はシチリアの人々が正統なシチリア王家と崇める末裔を処刑しシチリア島を占拠していた。占領軍の総督以下横暴なフランス兵らの圧政に対し、パレルモの民衆は教会の晩禱で鳴らされる「鐘の音」を合図に一齐に蜂起し、彼らを一人残らず殺害したのである⁴。この事件の引き金となったのが晩鐘であったことから「シチリアの晩鐘」事件とも呼ばれることが多い⁵。

また、「晩禱(夕べの祈り)」を「晩鐘」と読み替えるのは、第四幕にフランス人総督モンフォルテの「*Sudra squillare il vespero...*」という台詞があり、本来「晩禱が聞こえるその時に...」となるが、「*squillare*」に「鳴る」という意味があることから「晩禱の祈りの声が鳴るのが聞こえる」とするのではなく「*il vespero*」の部分を意識し「晩禱の鐘の音が鳴るのが聞こえる」として「晩鐘が聞こえるその時に...」と訳される⁶とところに由来している。

2-2. 作品の概要(1)シチリア人とフランス人の対立

この歌劇は、グランド・オペラの形式で、全体が五幕から構成され、第三幕に長大なバレエの場面が挿入されている等の特徴を持っている。初演は1855年、パリのオペラ座でフランス語のテキストで行われ、後に1856年ミラノのスカラ座において今日一般的となっているイタリア語版が上演された。

前述のとおり「シチリアの晩鐘」はシチリア人によるフランス人虐殺事件を意味しており、歌劇の

¹ 楽譜：Verdi, Giuseppe. *I Vespri Siciliani*; CP50278/05. Italia :MGB s.r.l (2013) ISMN 979-0-040-50278-7

² “*I Vespri Siciliani*”のvespriはvesproの複数形。単数形Vesproは「カトリックにおける教会聖務日課の最後から2番目の祈り」のことで「晩禱」「夜の祈り」と呼ばれている。

³ 大崎滋生監修『オックスフォード・オペラ史』平凡社(1999) p.230

⁴ スティーブン・ランシマン著 榎原他訳『シチリアの晩禱』太陽出版(2002) p.350

⁵ 吉田光司『ヴェルディ歌劇《シチリアの晩鐘》全曲』2009年、クリエイティブ・コア株式会社,[DVD]解説書 p.8

⁶ 河原廣之編集・校閲・注釈『シチリアの晩鐘』オペラ読本出版(2003) p.45の解説による。

中では実際に起きたシチリアの晩鐘事件が物語の主要な題材として扱われている。作品ではシチリア人とフランス人の対立が描かれ、第一幕では双方の対立関係の提示から開始され、第五幕フィナーレの場面でこの事件に至っている。ここでは作品名となっている「シチリアの晩鐘」と直接かかわる内容を中心に、シチリア人とフランス人の対立関係から概要をまとめる。登場人物関係は [図1] にまとめ文末に掲載した。

歌劇で設定されている時は1282年の復活祭の日⁷、場所はシチリア島のパレルモとなっている。序曲があり、第一幕はシチリア人とフランス軍兵士の対立が二つの合唱によって歌われる場面から始まる。この対立の深さが第五幕の最後に起こる「シチリアの晩鐘事件」というシチリア人によるフランス人への報復大虐殺に繋がることから、開幕場面に至るまでの経緯となる背景の理解が必要である⁸。

第一幕では対立構図の提示及び侵略側のフランス軍総督モンフォルテ⁹の登場がある。総督は恐怖政治の支配者として描かれシチリア人が絶対服従を強いられている状況下で物語が進む。反フランスを先導するシチリア王家に残された娘の公女エレーナ、そしてシチリアの若者アッリーゴ及びダニエーリらが登場する。

第二幕は、シチリアの革命の志士プローチダの登場から始まる。シチリア島に帰還¹⁰した彼はフランス兵達にシチリアの娘たちを誘拐するという策略を企て、それによってシチリアの男たちが再び復讐心に目覚め立ち上がるように導く。第二幕は彼らの男声合唱による復讐の歌が重なり合って終わる。

第三幕は、前半シチリアを支配するフランス軍総督モンフォルテの個人的な事実が明らかにされる。これは対立するシチリアの若者アッリーゴが総督の実の息子であることが判明する場面である。グラランド・オペラで挿入されるバレエ、フィナーレにモンフォルテが主催する舞踏会の場面がある。

フィナーレで繰り広げられる舞踏会は仮面舞踏会でモンフォルテ暗殺の舞台となる。ここでプローチダが首謀となり企てられた総督モンフォルテへ暗殺計画が実行される。しかしアッリーゴの裏切りにより暗殺は未遂（失敗）に終わり、反逆罪で捕らえられたプローチダ、エレーナ、ほかシチリア人たちは総督モンフォルテの命令により処刑されることになる。

第四幕は、フランス軍要塞。牢獄と処刑場の場面である。総督モンフォルテは捕らえたシチリア人たちからまずプローチダとエレーナの処刑を宣言。総督モンフォルテはシチリア人の女との間に生まれた実の息子アッリーゴに（フランス人の）自分を父と呼び認めれば全員を助けると条件を出す。シチリア人の仲間を救うためアッリーゴは総督モンフォルテを「父」(il mio padre)と呼ぶ。総督モンフォルテの命令で囚われのシチリア人は全員解放され、さらに息子を讃えエレーナとの結婚式¹¹の挙行が

⁷ 1282年の復活祭は3月30日。復活祭とは、キリスト教におけるイエス・キリストの復活を記念して祝う最も重要な祝日。

⁸ シチリア王は代々ノルマン系の血統で継がれていた。1194年、ノルマン系の血筋を継ぐハインリヒ六世王（=神聖ローマ帝国皇帝）以降ホーエンシュタウフェン家がノルマン王朝を継ぎ、シチリアの人々はその家系の王を祖国の王家として熱く支持していた。一方シチリア王家の勢力拡大を恐れた時のローマ教皇ウルバヌス四世はフランス王ルイ九世に働きかけ、弟のシャルル・ダンジューがフランス軍を率いシチリアを制圧した。フランス軍は大勢のシチリア人民を殺害しシチリア王を処刑、シチリア人が正統な王と仰ぐホーエンシュタウフェン家の王朝を根絶やしにした。さらに残されたシチリア人に対するフランス軍の横暴が続き、王家に残された娘と革命分子を中心にフランス人への報復と復讐への機運が高まっていた。歌劇の第一幕は、その緊張が極限に近づいた状況から始まる。シチリアの人々によって自国への侮辱に対する憤りと怒りを自ら抑圧して生きなくてはならないことへの思いが歌われる。

⁹ 以下、登場人物については「図1」の人物関係図を参照。

¹⁰ 外国（フランス軍）によって侵略された祖国シチリアを奪還するために周辺各国に支援を求める外交交渉から帰国したということ。プローチダは地中海のほぼ中心に位置するシチリアを出奔したのち東のビザンツ諸国から西のスペインまでを巡り援助を要請したが、具体的な支援を得られないまま再びシチリアへ密かに戻って来た。出国時は亡命者。第二幕冒頭で祖国への愛を歌うアリアがある。

¹¹ アッリーゴとエレーナの結婚は、フランス人（総督モンフォルテの血が流れる息子）とシチリア人（対立したシチリア王家）の和解を象徴する意味を持つ。総督モンフォルテはこのことによりフランスとシチリア両国の平和的解決を図ろうとした。

決まる。

第五幕は、フランスとシチリア両国の和解となる結婚式の場面。ここでプローチダが最後の逆襲に出る。結婚式での宣誓に合わせ教会の鐘が鳴り響く。鐘の音を合図にシチリア人たちは一斉にフランス人に襲いかかる。総督モンフォルテもシチリア人によって殺されるところで幕となる。

全体を通して、作品名のシチリアの晩鐘事件を動かす人物として重要なのはプローチダである。第二幕から登場し、このオペラの中でも有名なアリア『おお 汝パレルモよ』で祖国愛を歌うところから、第五幕で虐殺事件の発端となる教会の鐘を鳴らす合図を出すに至るまで、彼自身の復讐にかける不動の執念が周囲の人々を巻き込んで展開する。また、このオペラの最後では、ソリストとして唯一「復讐だ!」とシチリアの勝利を叫ぶ音符が与えられているのも彼である。

歌劇の作品名《シチリアの晩鐘》に示され、この作品が扱っている第一の題材と言える「シチリアの晩鐘事件」を中心に概要をまとめた。作品名を軸にこの作品の内容をまとめると、その中心は「シチリア対フランス」あるいは「シチリア人対フランス人」をテーマに展開する内容を追うことになる。

この解釈に従えば作品中の音楽も、例えば、序曲に含まれる「復讐のテーマ（動機）」や、第一幕開幕で歌われる対立の合唱、第二幕プローチダの愛国心溢れるアリアをはじめ、第五幕フィナーレにおけるソリストのプローチダとシチリア人の合唱アンサンブルなどに注目することになる。この視点を中心にする、作品中の様々な楽曲の中では、ソリストや合唱を含めシチリア人たちの祖国愛と復讐心の音楽表現が重要になる。

歌劇《シチリアの晩鐘》の作品名が表す「シチリアとフランスの対立による復讐劇」という直接的な内容に従い、概要(1)のようにこの作品の主題を浮き彫りにすることも一つの教材研究の方法として可能である。また、作品名を拠り所にしたアプローチは、この作品の最も基底となっている題材に目を向け、その点をしっかりと押さえ内容を理解するという点で、重要な意味を持っている。

一方で、作品名に特化した概要では、シチリア人とフランス人の対立以外の部分で描かれている内容が省略されることになる。しかし、その中に、この作品の別の主題とも言える重要な要素が含まれているということにも目を向けなければならない。つまり《シチリアの晩鐘》という作品名が指し示す事柄とは直結していない、作品名からは隠れている内容について明らかにする必要がある。

そこで、概要(1)で触れていなかった作品の内容についてまとめることにする。

3. 作品名にない作品の概要

この歌劇では概要(1)の他に二つの大きな題材があると考えられる。一つはエレーナとアッリーゴの恋愛に関することであり、もう一つは総督モンフォルテとアッリーゴの親子関係に関することである。オペラのドラマはシチリア人とフランス人の対立を軸に、そこに関わる男女そして父子という人間関係という二つのテーマが加わり、互いに絡み合いながら全体が展開している。

この二つの題材は概要(1)とは違い、その内容について作品名から直接連想することはできない。ここでは、歌劇を構成する三つの主要な題材から残る二つについて、作品名には表れていない内容として作品の概要(2)と同概要(3)としてまとめることにする。

3-1. 作品の概要(2) エレーナとアッリーゴ

エレーナはシチリア王家の娘である。シチリア王であったエレーナの父と兄（フェデリーゴ公爵）はフランス軍占領軍の指揮官である総督モンフォルテによって処刑されている。特に兄の処刑は、シチリアの民衆が正当な王家と認めてきたホーエンシュタフェン家の血筋を継ぐ王統断絶という意味を持つ。ただひとり王家で直系の血筋を持ち生き残った彼女はシチリア人によるシチリア国家存続に命を賭け、残されたアッリーゴやプローチダらの有志らとともに闘っている。シチリア市民からは王家を継ぎ祖国奪還を率いるリーダーとして尊敬されている。

第一幕、エレーナは教会の礼拝からの帰途、フランス兵たちの兵舎前の広場の場面において最初に登場する。最初の aria では亡き兄の仇を取るためシチリアの人々を鼓舞する。復讐心に燃え、シチリアのために生きる人生において、彼女自身の個人の幸せや恋愛が入る余地などまったく持ち合わせていない。

第二幕、前半の二重唱では、同士と信じていたアッリーゴから愛の告白を受ける。母を亡くしたアッリーゴはその後王家に引き取られ、エレーナにとっては家族のような存在であった。二重唱ではエレーナが「兄の仇」と「個人の愛」という間で動揺する様が歌われる。

第三幕の舞踏会での総督モンフォルテ暗殺の場面、暗殺の失敗と処刑に至る第五幕まで、エレーナは常に兄への忠誠心とアッリーゴへの気持ちの間で揺れ動いている。

第四幕には二人の重要な二重唱が置かれている。この部分は規模も大きく、ヴェルディは他の二重唱と区別して大二重唱¹²としている。この二重唱は全体が三つの部分から構成され、①二重唱 - ②エレーナのソロ - ③二重唱 となっている。①でエレーナは舞踏会暗殺で裏切ったアッリーゴへの怒りからはじまり、その彼から父が復讐の相手であるフランスの総督モンフォルテであることが告白される。②でエレーナはアッリーゴの運命を受け入れるが、兄への仇が果たせなかったことから、運命を受け容れ命を絶つ覚悟を歌う。③エレーナの死が避けられないことを悟り、エレーナを愛するアッリーゴも彼女と同じくともに死ぬことを決意する。

この二重唱では、エレーナとアッリーゴの関係は祖国シチリアへの愛国心をめぐって生まれた対立が、①で現実への衝撃と和解、②でエレーナのアッリーゴへの愛そして変えることのできない運命への諦念、そして、③で再び分かり合えた二人の愛が歌われるという流れになっている。全体の演奏時間もおよそ15分に及んでおり重要な場面の一つとなっている。

第四幕の集結部分では、アッリーゴの総督に対する態度¹³によりエレーナらは解放される。さらにエレーナは総督によってアッリーゴとの結婚を許可される。以降、エレーナ的心情は、総督暗殺の実行を邪魔して兄への復讐を果たせなかったという恨みから離れ、アッリーゴへの気持ちを素直に認め愛する人と結ばれることへの喜びに満ちている。

第五幕冒頭には第四幕を受け、結婚式が決まったエレーナの喜びを歌う aria 「シチリアーナ」が置かれ、続くアッリーゴの「情景とメロディア」で式を心待ちにするエレーナとの二重唱部分もある。

フィナーレではプローチダの陰謀とアッリーゴと彼の父親と判明した総督モンフォルテに対する思いの間で苦しむが、最後はシチリア人が蜂起しフランス人虐殺を開始する合図である鐘を鳴らしては

¹² 大二重唱 'GRAN DUETTO ELENA E ARRIGO'. 楽譜 pp.285-302

¹³ アッリーゴが、総督モンフォルテを自分の父と呼び、父親であることを公の前で認めること。

ならないと叫ぶ。エレーナの心の中では、シチリア人による国家の再建と兄の復讐への念は次第に弱くなっている。最終場面では「シチリアの晩鐘」が鳴りはじまるまでの緊張の高まりの中で、エレーナは暴動を起こすシチリア人たちの手から二人を護らなければならないという立場へと変わっているのである。

フィナーレにおけるアッリーゴは、プローチダに説得され一時シチリア側に翻ったエレーナを裏切り者と思込み最後までその思いに引きずられる。そして最後まで、エレーナが心の底ではアッリーゴと彼の父である総督モンフォルテを赦し受け入れようとした気持ちを信じたかどうかは明確にされないままオペラは終わっている。

エレーナとアッリーゴというシチリアで育った二人の若者の恋愛のエピソードは、この作品がシチリアの晩鐘事件に向かって刻々と進んで行く中で、シチリア人とフランス人の対立によって左右されるドラマとして織り込まれている。恋愛は男女の二人によって成立するものであるが、この題材の中では、エレーナの存在に注目する必要がある。エレーナは、アリアや二重唱など重要な楽曲を持ちながら、外国（フランス）に乗っ取られた祖国シチリアの奪還という政治的指導者から、最も愛する人とどう生きるかという課題に向き合う一人の人間あるいは一人の女性に変容している。最初は事件に向かって人々を動かす原動力であった人が、一つの方向に人々が動き出して作り上げた民衆のうねりが巨大な慣性力を持って突き進むようになった時、もはやその流れを押しとどめ逆らうこともできず、遂にはその渦に従って生きなくてはならないという立場に陥ってしまうのである。

このように、この題材では作品名の「シチリアの晩鐘」事件そのものではなく、そこで翻弄される男女の若者の恋愛を軸とする感情が描かれている。この事件はシチリア人の勝利で終わっているが、エレーナは勝利したシチリア側にあっても心から勝利を祝えないシチリア人である。エレーナはアッリーゴとの関係において、個人の幸福が復讐の応酬の中でふみにじられるという悲劇的な存在となっているのである。

3-2. 作品の概要(3) 総督モンフォルテとアッリーゴ

この概要はこの作品の真の主題ともいえる。総督モンフォルテとアッリーゴの関係は大きく二つある。一つは、シチリアに侵略し前シチリア王を処刑したフランス軍の最高司令官である総督モンフォルテと、外国軍からシチリア国家を奪還しシチリア王家の復讐を遂げたいシチリアの若者アッリーゴという対立関係。もう一つは、父モンフォルテと息子アッリーゴという親子関係である。

前者は「シチリアの晩鐘」事件の原因となる対立を背景としていることから、作品名に直接係る要素ともいえる。一方後者は、この歌劇の台本の元となったドニゼッティの未発表歌劇《アルバ公爵》¹⁴における「父と息子」という主題が、形を変えてこの作品に引き継がれた要素である。

ヴェルディは加筆して出来上がっていた台本に不満足であり、特に、終幕第五幕の改訂をスクリーンに要求した。しかしその要求には一切応じられず、最終場面の創作では大変苦心している。台本の欠点は最後が音楽劇として感動的な結末にできないところがあり、父の死を虐殺事件の中でどのような印象に残すかが難題として残っていた。

¹⁴ 歌劇《シチリアの晩鐘》の原作に当たる作品。《シチリアの晩鐘》はもともと台本作家スクリーブがドニゼッティのために書いた歌劇《アルバ公爵》の台本に「時・場所」などの変更を加え、「シチリアの晩鐘」事件を新たに挿入し、弟子のシャルル・デュヴェリエに書き直させたものである。原作《アルバ公爵》では、父アルバ公爵と息子マルチェッロの親子関係が中心になっている。父と息子の関係では、《アルバ公爵》は最後に息子（マルチェッロ）の死という自己犠牲で終わるが、《シチリアの晩鐘》では父（モンフォルテ）の死による結末となる点で大きく異なっている。

ここで重要になるのが、台本を批判したヴェルディが音楽を通してオペラの結末におけるモンフォルテの印象をどのように残したいと考えていたのか、である。同時にそこには、結末の印象を作り上げるためにそれぞれの幕でモンフォルテをどのように描いたか、ということにも注目することになる。モンフォルテを再考することは、作品全体を改めて解釈することに関わってくる。

これらをふまえ、ヴェルディがモンフォルテとアッリーゴの二人を作品の中でどのように扱っているかに焦点を当てて作品の概要をまとめることにする。

総督モンフォルテとアッリーゴの親子関係は、最初隠された事実として扱われている。幕が進むにつれて次第に登場人物の間で明らかになっていく。

第一幕、シチリアを占領したフランス軍の総督モンフォルテはパレルモのシチリア人たちから専制君主的で恐怖を与える軍人として登場する。危険反乱分子としてアッリーゴを捕らえるが無罪放免する。圧倒的な軍力でシチリアを制圧する侵略軍のトップとして、第一幕では、エレナや彼女の侍女ネッタ、同部下のダニエーリをはじめとするシチリア人に対して常に余裕を見せている。

この第一幕ではまだ親子関係は明らかになっていない。しかし、モンフォルテによるアッリーゴの無条件での釈放、また、第一幕の終わりでアッリーゴに政敵エレナとは関わるなと命令するなど、モンフォルテがアッリーゴを特別な扱いで関わっていることが認められる。次の第二幕にモンフォルテは登場しない。

第三幕、第一場はモンフォルテ宮殿の執務室の場面である。モンフォルテは現地妻であったシチリア人女性（＝アッリーゴの母）の手紙を読む。アッリーゴがすでに亡くなったその女性との間に生まれた自分の子供であったことが判明する。モンフォルテは手紙を読み、アッリーゴを自分の息子と認め、悔い改める。そしてこの場面でモンフォルテのアリアが置かれ、再び息子と和解し親子として幸せに生きたいと願う気持ちが歌われる。

この場面では、第一幕でのシチリア人を震え上がらせる総督としての人格とは全く異なる父親として弱さを率直に表出する人格が現れる。《シチリアの晩鐘》の中で、モンフォルテの描き方の転換点がここにあるといえる。以降、オペラの中でモンフォルテはよき父としての理想を実現したいと考える人として重点が置かれ描かれている。

なお、母親がアッリーゴを外国人支配者である父親を憎むように育てたため、シチリア人として成長したアッリーゴがフランス人である総督モンフォルテと敵対している¹⁵という詳細については、《シチリアの晩鐘》の台本の中では触れられていないため、作品の背景として教材研究の中で予め確認しておくことが必要である。

第一場の後半では、実の息子であることを知ったモンフォルテとアッリーゴの二重唱がある。この二重唱は、アッリーゴに親子関係が明かされるという重要な内容を持っている。若き青年アッリーゴは母の手紙からその事実を知り、衝撃を受ける。同時に、それが愛するエレナとの決別も意味することから事実を受け容れることができない。モンフォルテは息子に拒絶される父親の苦悩を抱え、アッリーゴは親子への愛とシチリアへの祖国愛との間で悩むことになる。二重唱では隠されていた事実

¹⁵ 親子関係は原作《アルバ公爵》での設定を踏襲している。原作では、オランダを支配する外国人支配者アルバ公爵と支配地のオランダ女性との間に男子が生まれる。女性は公爵から逃れ息子には父を明かさず外国人支配者を憎むように育てる。成長した息子は支配者アルバ公爵により殺害されたオランダの前統治者の娘と協力し復讐しようとするが、公爵が実の父親であることが判明し、肉親への愛と祖国への愛の相克に悩む、という内容となっている。

向き合った父と子それぞれの葛藤が表されている。父モンフォルテはシチリアにおける自分の地位と権力を使い、アッリーゴを自分に取り込むことでフランスとシチリアという対立を彼から忘れさせ、親子としてともに幸せに生きたいと望んでいることを強く感じさせる。

続く第二場はモンフォルテが主催する舞踏会の場面である。ここでは、主催するモンフォルテが用意した出し物という設定で、グランド・オペラに特有のパレエが置かれている。華麗な踊りを楽しんだ後、未遂となるモンフォルテ暗殺事件が起こる。

宴会の途中、エレーナやプローチダを中心とするシチリア人たちの暗殺集団が客人に紛れ込む。アッリーゴはエレーナとプローチダから事前に父モンフォルテの暗殺計画を知る。そして、暗殺が実行されようとした瞬間、アッリーゴはシチリアの仲間による復讐よりも父の命を選び仲間への裏切り行為を犯す。エレーナとプローチダをはじめシチリアの仲間は捕らえられ、モンフォルテから処刑(死刑)の宣告を受ける。

ここでアッリーゴは、「シチリアを愛するシチリア人の男」と「仇敵を父親とする子」という二つの立場を持っている。暗殺が実行に移された時、アッリーゴは反射的にモンフォルテを守る。舞踏会はシチリアのために復讐を成し遂げることが可能な数少ない機会であったにもかかわらず、アッリーゴは自ら未だ父と公言していないモンフォルテのことを助けた。つまり、シチリア国家の名誉を超えて父親の命を守ることを選ぶのである。捕らえられた謀反人ら多くのシチリア人が処刑されることになるが、総督モンフォルテは亡き妻の手紙に書き残された遺言を守り、息子のアッリーゴだけは特別扱いにして自分の下に保護するのである。

第四幕は前半にアッリーゴとエレーナの和解の場面がある。続く後半フィナーレはアッリーゴによるモンフォルテに対する父親としての認否が焦点になる。総督の権威でモンフォルテは弱い立場のアッリーゴに自分を父と認めるよう迫る。この場面の中で、シチリアの同志プローチダにもアッリーゴがモンフォルテの息子であることが明かされる¹⁶。アッリーゴは、シチリアの仲間たちを処刑から救うため、遂にモンフォルテを「父上」と呼び、シチリアの人々の前でフランス人総督を父親と認める。

モンフォルテにとって、アッリーゴから父親と認められることがどれほど重いことであり、また「父上」と呼ばれることがどれほどの喜びであるかを、ヴェルディは音楽で物語っている。アッリーゴが「ああ 父上! 父上」¹⁷と叫ぶその時、オーケストラは転調しながら天が開かれるごとく一瞬オルガンを連想させるような響きを見せ、次のモンフォルテの「何と嬉しい 本当か?」という応答へとつないでいる。

モンフォルテにとって親子関係の回復は最大の希望であり、彼がその瞬間に感激する心の様子が表現されている。この部分の劇的な変化を伴う音楽は、オペラ全体の中でも特筆すべき部分といえる。

第四幕フィナーレ後半は、その喜びに浸る父モンフォルテが息子アッリーゴにエレーナとの結婚を認め復活祭の日の夕暮れに式を挙行することへと展開する。挙式を当日中に行うと宣言するモンフォルテの台詞の中に「晩鐘の響きがきこえよう」¹⁸がある。作品名の由来《シチリアの晩鐘》の事件の引き金となった晩鐘は、この場面では父モンフォルテの息子への祝いの鐘となるはずだったのである。

四重唱のフィナーレ最後のアンサンブルでは、次の第五幕への伏線となるプローチダによる復讐心

¹⁶ モンフォルテはアッリーゴのことを「わしの血を引く者が」(“e il mio sangue” = お前には私の血が流れている)と言う。それを傍で聞き逃さなかったプローチダに、すでに事情を知っていたエレーナが「総督の息子なのです」と説明する。

¹⁷ 楽譜p.321から調号はb5個。実際は処刑に向かう直前まで変二短調、アッリーゴが「父よ!」と叫ぶ直後に変二長調の明るい和音が響き渡り、その輝かしい響きの中でモンフォルテは「おお、この喜び! これは真実だろうか」と応答する。

¹⁸ 楽譜p.337“s'udrà squillare il vespero”. 本文p.3, 脚注6を参照。

が歌われる。このプローチダの再起は、アッリーゴからようやく父と認めたモンフォルテの命を奪うという結末への導線となる。第四幕は喜びの頂点にあるモンフォルテと、シチリア復興への愛国心に燃えるプローチダとの対比が最も大きくなるところで終わる。

第五幕では、モンフォルテはわずか数分足らずの最終景にのみ登場する。プローチダに問い詰められ迷うエレーナと誤解するアッリーゴの仲立ちをし、二人を結婚の祭壇へと導くが、鐘が鳴りシチリア人たちに襲撃されその場に倒れ息絶える。

ヴェルディが難色を示したこの最終景で、アッリーゴがモンフォルテと向き合う時間は極めて短い。《シチリアの晩鐘》の作品名に直結する事件が勃発し、政敵フランス軍の長である総督モンフォルテの死をもってこのオペラは幕となる。鐘が鳴り始めてからモンフォルテへの致命的な一撃までは僅か数十秒程度で、音楽は素早く展開しプローチダ以下シチリア人たちが勝利を声高く歌い上げる。この結末は、作品名のとおり、シチリアの晩鐘事件で再び祖国を自分たちで取り戻したところで終わっている。アッリーゴは為すすべもなくその場にただ呆然と立ち尽くすのみである。

以上、作品名が直接示している内容をもとにした概要(1)と、物語の複線として描かれている二つの主要な題材から概要(2)および(3)をまとめた。それぞれがこの歌劇の骨格を形成し全体を作り上げており、これら複数のドラマがこの作品に一層深みを与えている。

確かに、《シチリアの晩鐘》事件にまつわるシチリアの勝利に終わっているこのオペラは、作品名とその内容の関係において概要(1)の題材が前面に出されている作品である。しかし、この作品全体を観終わった時、最も心に残るのは、プローチダの勝利の叫びとシチリア人たちの高らかな合唱に歌い上げられる前シチリア王復讐達成と外国占領軍からの祖国シチリアの解放の歓喜なのではなく、政治的に隔てられた父と子の親子関係を修復し、息子を祝福とともに幸せに生きる一筋の光を見出しながらも命を絶たれたモンフォルテの方である。内容として、作品名に直結している概要(1)よりも概要(3)の方がこの歌劇の主要な主題となっているように思われる。それは、第一幕から最終幕に至る間にアッリーゴの父としてのモンフォルテが丁寧に描かれており、彼の心情をヴェルディが音楽において積み上げてきているからに他ならない。

そこで、作品名と直接結びついていない内容も作品の本質になるということについて、概要(3)から考察する。

4. 《シチリアの晩鐘》における概要(3)の重要性

オペラの結末で残されたモンフォルテの印象は、シチリアを占拠し権力を盾に統治するフランス軍総督ではなく、シチリア人の妻との間に生まれた子の幸せを願う一人の父親である。モンフォルテは幕が進むにつれて、総督から父へと描かれ方が少しずつ変化していることが見取れる。モンフォルテを中心に、「音楽」と「原作」に関わる二つの視点からその特徴をまとめることにする。

4-1. 音楽における扱い

音楽上モンフォルテに関わる主要な部分をまとめると次のようになっている。

序曲	モンフォルテの主題
第一幕	四重唱(エレーナ、ニネッタ、ダニエーリ、 <u>モンフォルテ</u>)

二重唱(アッリーゴ、モンフォルテ)

第二幕 [無し]

第三幕第一場 情景とアリア(モンフォルテ)

二重唱(アッリーゴ、モンフォルテ)

第二場 フィナーレ(エレナ、アッリーゴ、モンフォルテ、プローチダ)

第四幕 フィナーレ四重唱(エレナ、アッリーゴ、モンフォルテ、プローチダ)

第五幕 フィナーレ(モンフォルテ)

モンフォルテに関する音楽は、第三幕にアリアが一曲あり、それ以外はすべてアンサンブルとなっている。この中で重要なのは、第三幕第一場のアリアとそれに続くアッリーゴとの二重唱であるが、もう一つ序曲を含め、オペラ全体の中の音楽的な扱われ方としてそれぞれ注目すべき点がある。

冒頭のシンフォニアはヴェルディの歌劇にある序曲の中でも単独で演奏されることの多い楽曲である。ここには、続く第一幕から第五幕で用いられているいくつかの音楽主題が使われている。主要な主題として、第二幕でシチリアの男たちが歌う合唱に含まれる復讐の主題、第一幕のエレナのアリア(カヴァティーナ)で歌われる祈りの主題、第三幕第一場の二重唱でモンフォルテが父親として歌う願いの主題、第五幕最後でシチリア人たちが叫ぶ虐殺の主題などがあり、多岐に及んでいる。

オペラ全体を総括しているこの序曲の中で、第三幕第一場の二重唱で歌われるモンフォルテのテーマは非常に明確に聴こえる旋律として三回現れる。緩やかな上行形を特徴とする優美な旋律は、優しさで人の心を包み込むような表情を持っている。最初はチェロで奏されるこの二重唱のモンフォルテの旋律は、他の主題に比較して序曲において特別に用いられ重要視されているように思われる。開幕前の音楽の中でモンフォルテの音楽は聴衆にしっかりと提示されているのである。

序曲に使われていたこの二重唱の主題は、第三幕ではモンフォルテのみならず、アッリーゴの歌う旋律にも使われている。オペラの冒頭から全体の前半最後に置かれている二重唱が作るドラマの折り返し点までの間に、恐るべき総督モンフォルテは、この主題の複数回にわたる提示によって、心から子を愛する優しい父親へと変容している。

続く後半の第四幕から終幕まで、この流れの中でモンフォルテを見ると、暗殺に失敗したシチリア人を投獄し処刑宣告をすることもアッリーゴに父と認めさせるための方策と考えれば、彼の冷血な態度は表面的なものであり、その奥には子を思う血の通う父親像が浮かび上がってくる。シチリア人の復讐の的となり続けているモンフォルテが徹底して憎悪に満ちた総督と感じられないのは、台本に描かれている人物像の中にある彼の本質的な性格を、音楽を通してヴェルディが巧みに表現しているからだと考えられる。

第三幕の二重唱以降のモンフォルテは、歌う箇所も極めて少なく音楽的な内容としては実際それほど重要となる部分が見られない。グランド・オペラ特有のバレエが第三幕の中間に置かれ、オペラの後半はプローチダを物語の背景に据えた概要(2)のエレナとアッリーゴのドラマを中心に展開している。しかし、終幕の最終場面でシチリア人によって殺害され倒れるモンフォルテと周りで歓喜するシチリア人たちという場面で幕となった時、子を愛する父モンフォルテというキャラクターが強く生き残るのは、前半の第三幕までに音楽の中でヴェルディが十分に彼を描き出しているからである。

4-2. 原作と歌劇台本における扱い

歌劇《シチリアの晩鐘》は別の歌劇《アルバ公爵》を原作としていることはすでに述べた。ヴェルディは、原作に修正が加えられ、第四幕と第五幕は大幅に加筆されたものを受け取っている。その作業は《アルバ公爵》の終わりに全く別の虐殺事件をつなぎ合わせるといったものであった。

もともと原作におけるドラマの主題は、作品名のとおりアルバ公爵とその息子の物語にあった。原作では、最後に息子が自己犠牲となり父の身代わりとなって死ぬ結末となっている。時代と場所の設定も異なり登場人物の名前も違っているが、第三幕までの失われた親子関係を回復するという主題は、原作から《シチリアの晩鐘》にも引き継がれ、この二つの作品で共通している。

ヴェルディ自身は作曲する時点で、《シチリアの晩鐘》の台本が《アルバ公爵》の焼き直しであり、その後半がもともとは原作に存在していなかった別のエピソードを付け足したものであることを知らなかったが、台本作家のスクリーンに対して、特に第五幕は強く書き直しを要求している。台本作家は修正を受け入れず、ヴェルディは台本に納得できないまま作曲することになった。

こうした経緯から、ヴェルディが台本の内容をよく理解し共感していたのは第三幕までだったとも考えられる。《アルバ公爵》では《シチリアの晩鐘》におけるアッリーゴに相当する登場人物の息子は一貫して矛盾のない行動をとっている。しかし、《シチリアの晩鐘》でアッリーゴはシチリアの仲間を裏切るという行為を取る。さらに、最後の結末は彼自身が自らの命を運命の代償とするのではなく、父であるモンフォルテの死という結末となっている。最終場面を丁寧に描きたかったヴェルディは、台本の不足を思うような音楽構成で補うことができなかった部分があったと考えられる。このオペラ全体を鑑賞し終わった時に感じる達成感の無さというものは、この満たされなかった部分によるものが影響していると思われる。

作品の結末で鑑賞者に強く残る印象は、《シチリアの晩鐘》という作品名が示す虐殺事件とその勝利に歓喜するシチリア人たちではなく、彼らによって殺された父モンフォルテの死の中に終わることのない人間の憎しみの連鎖にあるように感じられる。それはこのオペラの前半で描かれた、原作が主題としていた、父と子をめぐるドラマの力強さが第三幕まででしっかりと音楽にも反映されているからではないかと考えられる。ヴェルディ自身は台本の成立の経緯を知らなかったにもかかわらず、その中で描かれている最も重要な主題を正確に読み取っていたといえる。そうした舞台の表には見えない作用がこのオペラ全編にあることにより、作品名とは違ったところに鑑賞者の意識が向けられることになると思う。

以上、概要(3)の重要性について、ヴェルディが作曲した音楽面と、作曲の元となった台本という二点から再考した。ここでは《シチリアの晩鐘》は作品名では直接提示されていない主題の中に、作品の大切な力点が存在していることを確認した。そして、その音楽の中に、ヴェルディがこの作品で劇音楽として創作した素晴らしい内容が含まれていることが明らかになった。

5. まとめ

歌劇作品との出会いは、単独で演奏される序曲や有名なアリアが機会となることも多い。また、作品名から作品に興味を持ち、中身を知りたいという場合もある。その場合、劇音楽の教材研究を通じた作品の内容や価値の探求において、作品名はその第一印象を左右する大きな要因となる。作品名が内容そのものを集約していることに違いはないが、その言葉に示されている一面のみにとどまるこ

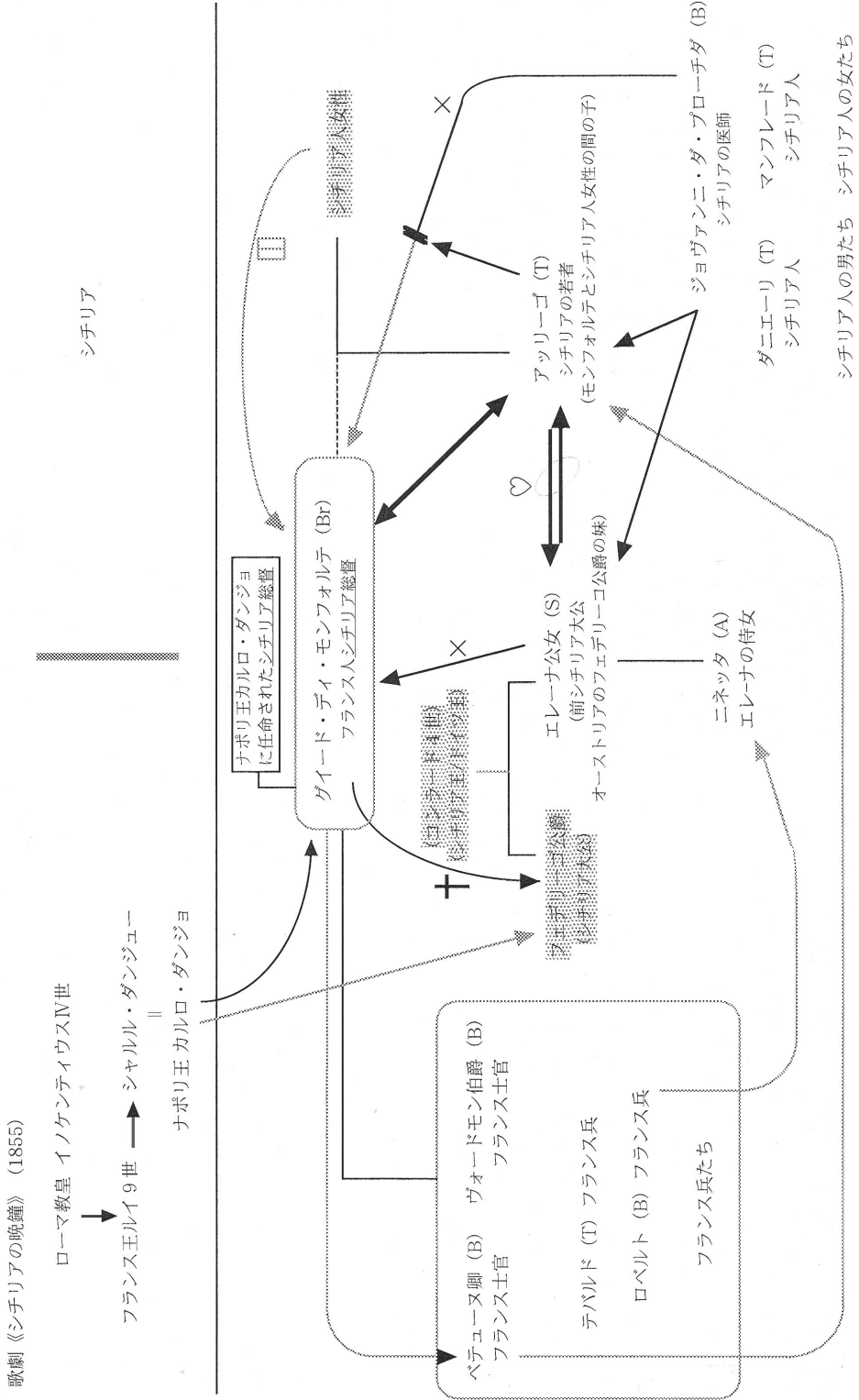
となく、作品が描いている内容について様々な視点から感じ、考え、その本質を導き出し、作品が持っている価値を引き出すことが大切である。

本考察を通して得られる教材研究の一つの方法として、内容から作品名を考案してみる、ということが考えられる。例えば、本論で取り上げた《シチリアの晩鐘》ならば、概要(1)の別名として〈シチリアの志士プローチダ〉や、若い男女の愛を主要なテーマとする概要(2)から〈公女エレナ〉、また、父親に重点を置いた親子関係を主要なテーマとする概要(3)から〈総督モンフォルテ〉などの作品名が考えられる。仮に概要(3)の〈総督モンフォルテ〉をこの作品の作品名に代えて鑑賞してみる。その場合、内容は全く同じ作品であるにもかかわらず、作品名が異なることでその受け止め方は大きく違ってくるはずである。

劇音楽の教材研究には、その中の一つに作品の価値を見極めるという重要な目的がある。その目的を達成するために、一度は作品名から離れて作品と向き合うことも有益だと考える。作品名にとらわれず、柔らかな発想で作品を受容することが作品の音楽理解に有益となる。

平成30年9月28日受理

[図 1]



参考文献

浅香淳編『オペラ辞典』音楽之友社 (1996) ISBN 4-276-00050-5 C1573

音楽之友社編『最新名曲解説全集第19巻 歌劇Ⅱ』音楽之友社 (1982) ISBN4-276-01019-5

小畑恒夫著『作曲家◎人と作品シリーズ ヴェルディ』音楽之友社 (2004) ISBN 4-276-22182-X

河原廣之訳『シチリアの晩鐘』オペラ読本出版 (2003) ISBN4-901780-21-2

スティーブ・ランシマン著, 榎原勝他訳『シチリアの晩鐘 十三世紀後半の地中海世界の歴史』太陽出版 (2002) ISBN 4-88469-282-9

ジャン・ユレ著, 幸田礼雅訳『シチリアの歴史』白水社 (2013) ISBN978-4-560-50985-2

高山博著『中世シチリア王国』講談社現代新書 (1999) ISBN4-06-149470-8

永竹由幸著『ヴェルディのオペラ 全作品の魅力を探る』音楽之友社 (2002) ISBN 4-276-21046-1

ロジャー・パーカー編, 大崎滋生監訳『オックスフォード オペラ史』平凡社 (1999) ISBN4-582-10924-1

楽譜

Verdi, Giuseppe. *I Vespri Siciliani* : Dramma in cinque atti di H.Scribe e C.Duveyrier; CP 52078/05. Italia : MGB s.r.l (2013) ISMN 979-0-040-50278-7

映像資料

ヴェルディ, 歌劇《シチリアの晩鐘》全曲, リッカルド・ムーティ指揮, ミラノ・スカラ座歌劇場管弦楽団, ミラノ・スカラ座バレエ団, ピエール・ルイージ・ピッツィ演出, 1989年収録, クリエイティヴ・コア株式会社, 2009年. TDBA5089-90 [DVD]

**On Teaching Material Research of the Dramatic Music
: Focusing on the Relationship between the Title
and the Contents**

KOHARA Shin-ichi